

カリフォルニア大学バークレー校 C・V・スター東アジア図書館所蔵
『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經』翻刻 訓読 訳注 解題

カリフォルニア大学バークレー校 C・V・スター東アジア図書館所蔵

『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經』

翻刻 訓読 訳注 解題

凡例

一、翻刻の行取は底本の通りとする。

一、翻刻は原則通用字体を使用し、誤写等についてもそのまま表記する。虫損等によって判読できない箇所については□で示し、墨跡から判断した場合は「」で示す。また適宜句読点を施す。

一、訓読と現代語訳については、上段に訓読、下段に現代語訳を、内容を対応させながら配置する。

一、本経は白文のため、適宜仮名を補いながら訓読を行う。

一、現代語訳に際して、適宜語句等に注を施す。文章の主語や対象を説明する補訳は「」、そのほかの補注は（ ）で提示する。

一、『注好選』巻下「狐仮虎威第三十三」、『今昔物語集』巻五「天竺狐借虎威、被責発菩提心語第二十一」は共通した内容を有しているため、適宜参照する。

阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經

阿謨伽三藏撰譯

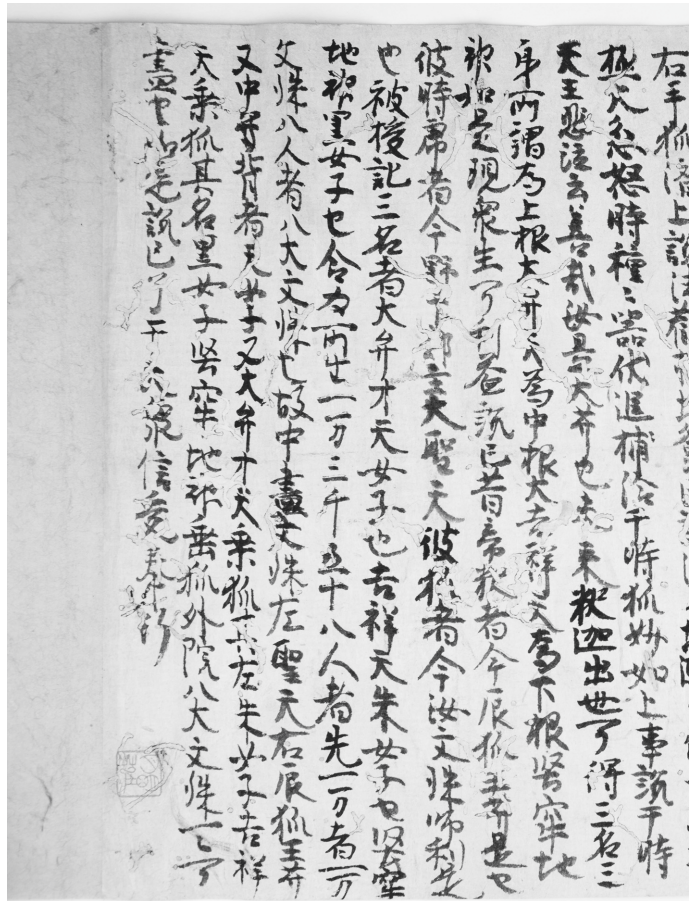
爾時鞞伽牟尼告文殊師利言乃往古世過无量劫此娑婆世界有山名曰吒羅山其山白狐名曰地德以百八十術方術假現虎形諸禽獸令布畏一生之內殺生為首時有帝闍之孫行彼狐急思降伏伺求向自然相存目緣一生之間假我威力无量禽獸為殺害我時狐天地為證更君之不假威神有此言敢不用重地德晴伏見神術已盡欲逃去走隱間一穴井墮落是時甚深不敢登故一生罪垢懺悔云我念過去世雪山童子身投於半偈越生死之苦薩太王子身施於餓虎備相好於竹林之中我復如是施為帝未得果我身於悖惜命深坑為已如是懺悔已穴井深底臥爾時三千世界六種震動天魔外道懼怖乎從天雨无量種色之花諸天宮殿不安時淨居天王名曰千眼帝尺以頗梨鏡照見三千世界此娑婆世界古吒羅山中於一穴井深底內有發大菩薩者于時彼天王飛行穴井口居乎於檀香之香懸墮穴內狐也天死得氣色云助我於汝說法天王以神術申右手狐濟上說法勸持地登已說法不堪逃去彼王急現

【翻刻】

阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經

阿謨伽三藏撰譯

爾時、鞞伽牟尼、告文殊師利言、乃往古世過无量劫、此娑婆世界^①有山、名曰古吒羅山。其山白狐、名曰地德。以百八十術方、虎假勢現虎形。諸禽獸令布畏、一生之間殺生為旨。時有虎。聞之、尋行彼狐急思降伏。伺求間、自然相云、何因緣、一生之間、假我威力、无量禽獸為殺害哉。時狐、天地為證、更君之不假威神。有此言、敢不用。重地德晴伏、見神術已盡、欲逃去。走隱間、一穴井墮落。是「井」、於甚深、不敢登故、一生罪垢懺悔云、我念過去世雪山童子身投於半偈、越生死之苦海、薩太王子身施於餓虎、備相好於竹林之中。我復如是施為虎、未得果。然我身於悖惜、命深坑為亡。如是懺悔已、穴井深底臥。爾時、三千世界六種震動。天魔外道懼怖乎。從天雨无量種色之花。諸天宮殿不安。時淨居天王、名曰千眼帝尺。以頗梨鏡、照見三千世界、此娑婆世界古吒羅山中、於一穴井深底內、有發大菩薩者。于時、彼天王飛行、穴井口居、「尋」於誓願之音。懸「墮」穴內、狐色天死得氣色云、助我「給」。「吾」為汝說法。天王以神術、申右手狐濟上、說法勸。持地登已說法不堪逃去。彼王急現



Courtesy of the C. V. Starr East Asian Library, University of California, Berkeley

極大「忿」怒。時種々器仗追捕給。于時、狐妙如上事說。于時、
 天王悲泣云、善哉。汝是大菩薩也。未來釈迦出世、可得三名・三
 身。所謂為上根大弁天、為中根大吉祥天、為下根堅牢地
 神^①、如是現衆生可利益說已。昔帝釈者、今汝狐王菩薩是也。
 彼時虎者、今野干部主大聖天。彼狐者、今汝文殊師利是
 也。被授記三名者、大弁才天女子也。吉祥天朱女子也。堅牢
 地神黑女子也。令為所生一万三千五十八人者、先一万者一万
 文殊、八人者八大文殊也。故中画文殊、左聖天、右辰狐王菩薩。
 又中尊背者天女子又大弁才天乘狐、其左朱女子吉祥
 天乘狐、其名黑女子堅牢地神垂狐。外院八大文殊一々可
 画也。如是説已了于大衆信受奉行。

極大「忿」怒。時種々器仗追捕給。于時、狐妙如上事說。于時、
 天王悲泣云、善哉。汝是大菩薩也。未來釈迦出世、可得三名・三
 身。所謂為上根大弁天、為中根大吉祥天、為下根堅牢地
 神^①、如是現衆生可利益說已。昔帝釈者、今汝狐王菩薩是也。
 彼時虎者、今野干部主大聖天。彼狐者、今汝文殊師利是
 也。被授記三名者、大弁才天女子也。吉祥天朱女子也。堅牢
 地神黑女子也。令為所生一万三千五十八人者、先一万者一万
 文殊、八人者八大文殊也。故中画文殊、左聖天、右辰狐王菩薩。
 又中尊背者天女子又大弁才天乘狐、其左朱女子吉祥
 天乘狐、其名黑女子堅牢地神垂狐。外院八大文殊一々可
 画也。如是説已了于大衆信受奉行。

注

- (1) 娑婆世界…『注好選』では「出婆国」とする。(2) 布…「怖」の省略か。
- (3) 晴…「請」の誤写か。(4) 淨居天…不還果を証した聖者が生ずべき、色界第四禪にある無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天のこと。ここは帝釈天が住む忉利天、あるいは地居天の間違いか。(5) 菩薩…「菩提」の誤写か。
- (6) 尋…「葉」にも見えるが、『注好選』には「問云汝作何觀行」、『今昔物語集』には「狐二問テ云ク汝テ何ナル心ヲ発コシ、何ナル願ヲ成セルゾト」とあることから「尋」を採った。(7) 申…「伸」に通ず。(8) 持…「時」の誤写か。
- (9) 地…狐の名前「地徳」を指すとも考えられる。(10) 妙…「如」の誤写による衍字か。(11) 可得三々牢地神…『注好選』には「成菩薩得二名。一云大弁才天、二名堅牢地神」、『今昔物語集』には「菩薩ト成テ二ノ名ヲ可得シ。一ハ大弁才天ト云ヒ、二ハ堅牢地神ト可云シ」とある。(12) 又…意味が取れないため、誤写か。(13) 名…「右」の誤写か。(14) 垂…「乘」の誤写か。

【訓読】

阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經 阿謨伽三藏撰訳

爾の時、釈迦牟尼仏、文殊師利に告げて言く、乃往古世无量劫を過ぎ、此の娑婆世界に山有り。名づけて古吒羅山と曰う。其の山の白狐、名づけて地徳と曰う。百八十の術方を以て、虎の勢を仮りて虎の形を現す。諸の禽獸を怖畏せしめ、一生の間殺生を旨と為す。

時に虎有り。之れを聞きて、彼の狐を尋ね行き急ぎ降伏せんと思ひて、伺い求むる間、自然に相いて云く、何の因縁ありて、一生の間、我が威力を仮りて、無量の禽獸を殺害するか。

時に狐、天地を証と為し、更に君の威神を仮らずと。此の言有るも、敢えて用いず。重ねて地徳請け伏せども、神術已に尽くるを見て、逃げ去さらんと欲す。

走り隠れる間、一つの穴井に墮落す。是の井、甚だ深きに於て、敢えて登らざるが故に、一生の罪垢を懺悔して云く、我過去世を念うに、雪山童子は身を半偈に投げて生死の苦海を越え、薩太子は身を飢えたる虎に施して相好を竹林の中に備う。我復た是の如く虎の為に施すも、未だ果たすことを得ず。然るに我が身を憐惜し、命は深き坑にて亡なんと為。是の如く懺悔し已りて、穴井の深き底に臥せり。

【現代語訳】

阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經^① 阿謨伽三藏撰訳^{②③}

その時、釈迦牟尼仏は文殊師利菩薩に「以下のように」告げた。非常に遠い昔、この娑婆世界に山があった。その名を古吒羅山^④と言った。その山の白狐は、名を地徳と言った。「その狐は」百八十の術方^⑤によって、虎の威を借りて虎の姿を現した。諸々の禽獸を恐れさせて、一生の間、殺生^⑥を主に行なっていた。

その時、虎がいた。その「虎の姿をした狐が殺生を行っている」話を聞いて、すぐに降伏させようと思ひその狐を探し求めた。「そして」自然と相いて言うことには、「どのような因縁によって一生の間、私の威力を借りて数多くの禽獸を殺したのか」と。

その時狐は「天地を証として、まったくあなたの威力を借りていない」と言ったが、「虎は」まったく信用しなかった。繰り返し地徳は降伏したが、「許される」術^⑧が尽きてしまったと判断して、逃げ去ろうとした。

走り隠れる間、ある穴に落ちてしまった。この穴は非常に深く、まったく登ることができなかったのだ。「これまで犯してきた」一生の罪を懺悔して言うことには、「私は、過去の雪山童子が半偈の為に身を投げて成道すること^⑩を、薩垂王子が飢えた虎にその身を施して竹林精舎にて菩提をえることを思えば、私もまたこのように虎に施せばよかったのに、未だ果たすことができなかつた。「その理由は」やはり自身の身が惜しく「思えるからであり、結果的に」、この命は深い穴で尽きようとしている」。このように懺悔し終わ

爾の時、三千世界六種震動す。天魔外道懼怖す。天より無量種の色の花雨あめからす。諸天の宮殿安からず。

時に淨居天王、名づけて千眼帝尺と曰う。頗梨鏡を以て、三千世界を照見するに、此の娑婆世界の古吒山中、一の穴井の深き底の内に於いて、大菩提を發せる者有り。

時に、彼の天王飛行し、穴井の口に居て、誓願の音を尋ぬ。懸曠たる穴の内、狐色天に死を得る気色にて云く、我を助給え。吾汝が為に法を説かんと。天王神術を以て、右手を伸べて狐を濟い上げ、説法を勸む。時に地に登り已りて説法に堪えず逃げ去る。彼の王急に極大忿怒を現す。時に種々の器仗もつて追捕し給う。時に、狐如上の事を説く。

時に、天王悲泣して云く、善きかな。汝は是大菩薩なり。未來に釈迦出世のとき、三名・三身を得べし。所謂上根の為には大弁天、中根の為には大吉祥天、下根の為には堅牢地神、是の如く現じて衆生を利益すべしと説き已れり。

昔の帝釈は、今の辰狐王菩薩是なり。彼の時の虎は、今の野干部主大聖天なり。彼の狐は、今の汝文殊師利是なり。

彼の授記せられし三名は、大弁才、天女子なり。吉祥天、朱女子なり。堅牢

つて、穴の中の深い底で倒れた。

その時、三千世界において「大地が」六通り震動した¹²。天魔や外道は恐れおののいた¹³。天より無量種の色の花が降ってきた。諸天の宮殿も穩やかではなかつた¹⁴。

その時に淨居天王は、その名を千眼帝尺¹⁵という。頗梨鏡¹⁶を用いて、三千世界を照見すると、この娑婆世界の古吒山の中、一つの穴井の深い底に、大菩提をおこした者がいた。

その時、彼の天王¹⁷は飛行し、穴井の口にとどまって、「狐がたてた」誓願の内容を尋ねた。はるかに広い穴のなかで、狐は色界の天に死を得た気配¹⁸で言うには、「私を助けてください。「そうしたら」私は貴方のために法を説きましょう」と。天王は神術を用いて、右手を伸ばし狐を「穴井の底から」救い上げ、「狐に」説法を勧めた。ところが「狐は」地面に登りおわつて説法に堪えず逃げ去つた¹⁹。彼の王は急にとても憤怒した「様子」を現した。そこで種々の武器をもつて「狐を」追いかけて捕まえられた²⁰。その時、狐は上のような事²¹を説き明かした。

その時、天王が悲しみ泣いて言うには、「素晴らしいことよ。貴方は大菩薩である。未來に釈迦仏が世に出るとき、三つの名・三つの身を得るであろう。いわゆる上根の「衆生の」為には大弁天、中根の「衆生の」為には大吉祥天、下根の「衆生の」為には堅牢地神²³、このように現れて衆生を利益するであろう」と説き終えた。

昔の帝釈は、今の辰狐王菩薩²⁴である。その時の虎は、今の野干部主の大聖天²⁵である。その狐は、いまの貴方「すなわち」文殊師利²⁶である。

その授記された三つの名は、大弁才「天が」天女子であり、吉祥天「が」

地神、黒女子なり。

生まれしむる一万三千五十八人は、先の一万は一万文殊、八人は八大文殊なり。故に中に文殊を画き、左に聖天、右に辰狐王菩薩なり。又中尊の背には天女子大弁才天狐に乗り、其の左に朱女子吉祥天狐に乗り、其の右に黒女子堅牢地神狐に乗る。外院に八大文殊を一一画くべきなりと。是の如く説き已りて大衆信受奉行す。

注

(1) 阿羅波沙囊吒尼羅闍那最極利益法式經：「阿羅波沙囊」は文殊の種子である「阿羅波遮那」であると考えられる。「吒尼」は鬼神の一種の「ダキニ天」であり、胎藏界曼荼羅外院に図示され、日本では稲荷神と同一視されることもある。「羅闍那」の意味は不明だが、「Rajān」で「王」の意であるため、それに関連する語句と考えられる。

(2) 阿謨伽三藏：唐代の訳経僧である不空金剛（七〇五―七七四）のこと。

(3) 撰訳：他の経論では見られない表現であり、唯一『曼珠室利焰曼德迦万愛秘術如意法』（大正二一・九七中）に「一行撰訳」とある。

(4) 古吒羅山：『注好選』では「祐吒山」、『溪嵐拾葉集』（大正七六・六三二下）では「古吒山」とする。

(5) 百八十の術方：狐・ダキニ天・巫者を背景とする術方か。百八十の数についても不明。『大日経疏』卷一〇「荼吉尼真言」のくだりには、ダキニについては「乗空履水皆無礙」（大正三九・六八七下）とある。「荼吉尼真言」を執り行う者は、呪術を自在に操ることができるので、人間の死期を六か月前から予知でき、その心を食うと「能得極大成就。一日周遊四域、随意所為皆得」（大正三九・六八七中）という。また『多聞吒尼經』では、ダキニの前身である狐が「我食

朱女子であり、堅牢地神〔が〕黒女子である。²⁷⁾²⁸⁾

お生まれになった一万三千五十八人は、先の一万は一万文殊²⁹⁾、八人は八大文殊である。そのために中央に文殊、左に聖天、右に辰狐王菩薩を描く。また中尊の背後には天女子〔にして〕大弁才天が狐に乗り、その左に朱女子〔にして〕吉祥天が狐に乗り、その右に黒女子〔にして〕堅牢地神が狐に乗る。外院に八大文殊を一つ一つ描くべきであると。このように〔仏は〕説き終わって〔聴聞の〕大衆は〔教えを〕信じ受け取り奉じて行った。

生命故具諸神通。飛空自在也、走地无障碍也」と説く。

(6) 借りて：底本では「仮」とある。

(7) 殺生：『注好選』『今昔物語集』には、殺生の記述は無い。『多聞吒尼經』では、釈尊がダキニ天の前身である狐について「今汝一巧好殺生故」と説く。

(8) 信用：底本の「用」を「用ゐる」と訓読し、「信賴する」という意を採用。

(9) 術：底本では「神術」とある。先の文を踏まえるならば「百八十の術方（神通力）の意だが、ここでは「他に許される方法」という意か。

(10) 判断：底本の「見」からの訳。

(11) 雪山童くことを…この表現は、『注好選』『今昔物語集』には無い。

(12) 六種震動：『大品般若経』卷一・『六十華嚴』卷三六・『八十華嚴』卷五二・『大般若経』卷一等の經典においては、仏が三昧に入るなどの瑞祥として十方世界が六通りに振動するという。ここでは、狐が懺悔し発心した時の瑞祥を指す。那東風「仏典に見られる「大地震動」」（『桃山学院大学総合研究所紀要』三六一―、二〇一〇）、大久保良峻「六種震動と天台義」（『天台学報』五九、二〇一七）など参照。

(13) 天魔外道懼怖す…六種震動により、天魔の宮殿を揺らし、天魔を懼怖させる記述は、慧遠撰『無量寿経義疏』卷上（大正三七・九六下）に確認できる。

(14) 諸天のゝかった：『注好選』には「帝尺宮并六欲天一と動」、『今昔物語集』には「六欲天皆動ス」とある。

(15) 千眼帝尺：帝釈天のこと。『別訳雜阿含經』卷三・『毘耶婆問經』卷下・『仏說弥勒下生成仏經』・『金光明最勝王經』卷七などに見られる。

(16) 頗梨鏡：『神道集』卷一・五「御正体事」によると、帝釈天の喜見城には、衆生の善業や悪業をうつし出す「浄頗梨鏡」があるという。また、付注箇所のような帝釈天が鏡を用いて世界を照らし見る説は、『釈氏要覽』卷下（大正五四・三〇四下）などに確認できる。そこには「大宝鏡」とあり、『大智度論』からの引用とするが、『大正新脩大藏經』本の『大智度論』には見当たらない。

(17) 彼の天王：『注好選』『今昔物語集』では、帝釈天と文殊が仙人の姿に変化し同行したとある。

(18) 色界の天々気配：「色天」は底本五行目の「浄居天」と呼応しているか。この狐の様子に関する描写は、『注好選』『今昔物語集』にない。

(19) 地面にゝ去った：『注好選』には「狐不説欲逃」、『今昔物語集』には「狐登ニケレバ菩提心ヲ忽ニ忘テ、不云ズシテ逃ナムト思フ心付ヌ」とある。

(20) られ：底本に「給」とあるため、敬語表現とした。

(21) 上のような事：虎の威を借りて殺生を行ったせいで、虎に追われて穴に落ちたが、それによつて菩提心をおこしたことを指す。

(22) 悲しみ泣いて：『注好選』『今昔物語集』では、慈悲の心をもつて授記をしたとする。

(23) 上根のゝ牢地神：『覚禪鈔』卷一〇九・吉祥天「所現身」（大正藏図像五・四八六下）は「或抄」の引用として、吉祥天には三種の身があり、上根の衆生のためには大弁才天女、中根の衆生のためには大吉祥天女、下根の衆生のためには功德天女の姿を現すとする。

(24) 辰狐王菩薩：『神道集』卷三・一四「稻荷大明神事」に、「抑辰狐菩薩者、本地大日如来、三世覚母大聖文殊、一切衆生菩提心行願普賢薩埵、仏法護持多門天王、心王意識如意輪觀音也」とあり、またその姿について、「金色微妙天女」

が「白色殊勝辰狐王」に乗ったものとする。

(25) 野干部主の大聖天：『蘇婆呼童子請問經』卷上（大正一八・七二三下）では、毘耶耶迦の四部（摧壞部・野干部・一牙部・龍象部）のうち、野干部の主を象頭とする。

(26) 昔の帝々である：『未曾有因縁經』（大正一七・五八〇下）では、狐を今の釈尊、帝釈天を舍利弗とする。

(27) 大弁才々黒女子：『神道集』卷三・一四「稻荷大明神事」では、辰狐王菩薩に天女子・赤女子・黒女子・帝釈子の四王子がいるとし、『溪嵐拾葉集』卷八二「卍字秘決秘中極極」（大正七六・七七四上）にも「卯神ハ帝釈之使者、午神ハ赤女子、酉神ハ天女子、子神ハ黒女子、丑未辰戌ハ辰狐王菩薩也」とある。『簠籩内伝』卷三・神上吉日には「己巳、辰狐王三女子此国飛来。天女巖島、赤女竹生鳥、黒女江島、三洲垂迹給日也」とある。

(28) この前と後の文章は内容が噛み合わないため、脱文が推測される。

(29) 一万文殊：一万体の文殊、または一万の眷属を従えた文殊か。佐々木守俊「五台山「一万文殊」像から蓮華王院千体千手觀音菩薩像へ」（『岡山大学文学部紀要』六五、二〇一六）。

(30) 一万三々大文殊：『溪嵐拾葉集』卷三九・吒天法秘訣「以天部可出離生死事」（大正七六・六三二下）に「山家御釈云、此天眷属中云、一万三千者三千世間、世間者七覺分也。五十者五道衆生也。八人者八大文殊」云云」とある。また、金沢文庫所蔵『乙足神供祭文』（『企画展 陰陽道×密教』、神奈川県立金沢文庫、二〇〇七）に近い表記がある。

『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經』解題

前島 信也
崔 鵬 偉
田 中 亞 美

一 書誌解題

ここで発表する資料は、二〇二〇年一月二十七日～二十九日に、本学教授の落合俊典先生と人文学情報研究所主席研究員長崎研宣先生とともに、カリフォルニア大学バークレー校C・V・スター東アジア図書館の古経コレクションの調査を行った成果のひとつである。

この『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式經』とは、東アジア図書館・賀蔣 (Ho-Chiang) コレクションに収蔵される三十行足らずの短い経典である。この経典は『溪嵐拾葉集』に吒枳尼天を説示する経典のひとつとして、名前を見ることができ、それ以外の情報は一切知られていない。

吒枳尼天祕決私苗

一。本説事 大日経 孔雀経 仁王経 阿羅婆沙囊吒枳尼経 相観陀羅尼経 刀自女経 神驗呪王経 八大童子経 一字呪王経 辰狐本因縁経
旃陀利王経 (正蔵七六・六三二下)

この経典について初めて言及したのは、反町茂雄『弘文荘在庫古書目録』

第九号・二一番(弘文荘、一九三七)である。ここで反町氏は以下のように述べる。

阿謨伽三蔵撰訳としるせるが大蔵経その他には未収のものなり。書写年代は鎌倉初期のものなるべけれど、体裁も普通の写経と異り書体は行書にて、一行の字詰も廿二字より廿四五字に及ぶ異例のものなり。用紙は縦九寸五分、横一尺七寸全長二尺八寸、総行数三十行。桐箱入。挿図は本経の前半を示したり。

ここでは経典の内容についての言及はなく、その阿謨伽三蔵(不空)訳の経典を大蔵経に見ることができない点とその体裁について提示するのみである。

そしてこの経典の名前が再び見られるのは奥田勲「カリフォルニア大学東アジア図書館蔵古経コレクション目録稿」(『聖心女子大学論叢』九四、二〇〇〇)である。これは奥田氏が調査をおこなったカリフォルニア大学バークレー校・東アジア図書館の古経コレクションの調査の報告である。奥田氏はこの古経コレクションをカリフォルニア大学に在籍した言語学者である趙元任(Chao Yuan Ren)のものとするが、今回の調査にご協力いただいた日本図書

司書であるマルラ俊江氏によれば、これは賀蔣 (Ho-Chiang) コレクションの一部である。

この賀蔣コレクションについて、『書物学』十八(勉誠出版、二〇二〇、四〇〜四一頁)の中で、マルラ氏が解説を行なっている。

シンガポール大学で中国文学の教授であった賀光中及び蔣振玉夫妻から一九七〇年代に購入した賀蔣 (Ho-Chiang) コレクションは、中国史・文学・哲学・音楽等の漢籍と和書の他、西域・中国・朝鮮・日本からの古写経・古版本から成る。日本の資料は、夫妻が一九五〇年代から六〇年代にかけて日本を訪問した際購入したものとされ、江戸時代にかけての古写経・古版本合わせて六十五点、及び雅楽等に関する写本と版本四十五本を含む。

このように、『溪嵐拾葉集』にのみ名前が示されたこの短い経典は、反町氏、賀光中及び蔣振玉夫妻を経て東アジア図書館へと所蔵されることとなったのである。

この『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式経』について、服部法照氏は「日本撰述偽経と『仏像図彙』」(『佛教文化学会紀要』二、一九九四)のなかで、吒枳尼天の凶像について先の『溪嵐拾葉集』の経典群を示し、日本撰述偽経であることを推定する。また、服部氏は「日本撰述偽経について」(『佛教文化学会紀要』一、一九九二)のなかでも、日本撰述の偽経について論じ、日本の庶民信仰において重要な役割を果たしてきたことを指摘する。そして現在でもなお刷られ続けている偽経の特色として、非常に短い経典であること(その多くが一巻であり、数行しかないものも存在する)、経典としての体裁が整っていないこと、経題が長いことを指摘する。これらの点を日本で撰述され

た偽経の「定義」とするには今一度議論すべき問題ではあるものの、少なくともこの『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式経』については、確かに日本撰述の偽経と共通する性質を有していると言える。

まず奥田氏が発表した『阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式経』の調書を示す。

B 8 阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式経

院政期写、卷子本、高二八・七、楮紙打紙、一紙、一紙長五二・二、三〇行、紺地ニ金泥ニテ絵ヲ描キタル後補表紙、巻尾ニ「月明／＼莊」单廓朱方印アリ、金銅被セ軸頭、

そして今回行った調査の結果を、奥田氏と重なる部分もあるが提示する。なお、虫損などによる欠損は□で提示する。

装幀…卷子

外題…阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那□極経 一卷

内題…阿羅波沙囊吒枳尼羅闍那最極利益法式経

尾題…(ナシ)

訳者…阿謨伽三蔵撰訳

表紙…紺地、金泥の五鈷・雲・独鈷・松などの絵。二八・六×二〇・九

状態…小破(虫損)

法量…本紙 二八・五×五二・二 後紙 二八・五×二二・五

印記…朱方印・月明莊(反町茂雄所蔵印)

備考…外題下に貼紙を剥がした跡、その下に朱書「印八十□ニワリ」の貼

紙あり。

返点・仮名の類、別筆による書き込みなし。

経文の字姿から、その書写年代を判読することはできないものの、奥田氏の指摘する院政期という印象はうけない。反町氏の指摘する鎌倉初期かそれよりやや時代を下るものと思われるが、これは識者に判断を委ねたい。それ以外の部分は概ね奥田氏の書誌情報の通りである。

この調査の後、司書のマルラ俊江氏より既に撮影されていた画像をお借りすることができたため、この画像をもとに日本古写経研究所主催の研究会を行い翻刻・訓読・現代語訳をおこなった。

この研究会は八月から十月にかけて、日本古写経研究所研究員・前島信也、早稲田大学文学学術院助教・崔鵬偉、早稲田大学院文学研究科博士後期課程・田中亜美の三人により行った。これはこの経典の内容が、『注好選』巻下「狐仮虎威第三十三」と近似していることが判明し、それに関連する研究を行っていた田中氏と『今昔物語集』を研究する崔氏に協力を依頼したことによる。

ここで、この翻刻・訓読・現代語訳の作業を通じて、この経典の特徴を提示しておきたい。

まず翻刻では、非常に判読が困難な文字が多い点が挙げられる。これは虫損によるものではなく、乱筆・省略・誤写によるものである。これは書写の際に生じたとも考えられるが、翻刻上はそのまま翻刻を行い、文脈から判断した文字については翻刻の中で注を付した。

訓読については、訓点・仮名がないものの文章の構造を明確にするために訓読をおこなった。経文の体裁をとっているが、変体漢文と判断できる箇所も存在しており、文脈から判断して読み下した箇所もある。

現代語訳については、近似する内容を有する『注好選』『今昔物語集』を

適宜参照し、補訳・補注を加えて示した。両書との関係とその内容については、崔・田中氏の解題を参照されたい。ただし二六行目の「黒女子也」「令為所生」については、前後の文脈が噛み合わないため、脱文が想定される。

以上、甚だ簡単ではあるが『阿羅波沙囊吒尼羅閣那最極利益法式経』の伝来と書誌情報について提示した。この資料が日本の中世における多様な民間信仰を研究するための一助となれば幸いである。この報告はマルラ俊江氏と東アジア図書館スタッフの協力によって成立した。この場を借りて感謝申し上げたい。

(前島信也)

二 内容と構成

書誌解題にも触れたように、本経典は日本撰述のダキニ天^①にまつわる偽経の一つとされる。その類話として、『注好選』東寺観智院本の下巻第三十三話「狐仮虎威」と、『今昔物語集』巻五第二十一話「天竺狐借虎威、被責発菩提心語」が確認でき、大筋は以下の通りである。^②

虎の威を借りて獣たちを脅していた狐が、それを知った虎に追われ、逃げるうちに穴に落ち、無常を観じて菩提心を発す。すると大地が六種に震動し、天界も動揺する。文殊菩薩と帝釈天が仙人の姿で現れ、発心のことを説くよう狐に求める。狐はまず自分を助けるよう求め、仙人はそれに応じる。ところが助けられた狐は菩提心を忘れ、そのまま法を説かずに逃げようとする。すると仙人は降魔の相となり狐を責める。狐が一部始終を打ち明けると、仙人は慈悲の心を発して狐を称え、釈迦仏の世

に菩薩となつて弁才天と堅牢地神という二つの名を得るだろうと授記して消える。そのときの仙人は文殊であり、狐は堅牢地神である。

虎の威を借る狐という故事を踏まえながら、ジャータカ風に記す点においては、『注好選』『今昔物語集』と本経典は一致する。しかし、前者は堅牢地神の前生譚を語っているのに対して、後者は文殊菩薩の前生譚とする。

また、『注好選』『今昔物語集』の原拠と指摘されている、蕭斉の釈曇景訳『未曾有因縁経』巻上には、次のような釈迦の本生譚がある。³⁾

毘摩国の徒陀山に住む野干が、獅子に追われて穴に落ちてしまう。野干は穴の中で無常を思い、生命を惜しんだことを悔いて発心する。帝釈天がこれを知り、諸天を率いて野干に説法を請う。野干は穴から助け出され、諸天が脱いだ天衣を重ねた高座で法を説く。その七日後に野干は命終し、兜率天に生まれる。そのときの野干は釈迦であり、帝釈天は舍利

弗である。

虎の威を借る狐の故事がみられないが、穴に落ちた獣に帝釈天が説法を請うというプロットは本経典と共通する。

前掲した翻刻・訓読・現代語訳に付した注釈において、『注好選』『今昔物語集』と本経典との本文の異同については詳細に指摘してある。ここでは、『未曾有因縁経』を加えて、諸書の異同を表にして示せば、表1の通りになる。

表1に示した諸書の相違点は、主に冒頭部と結末部に集中している。

まず、冒頭部について、『未曾有因縁経』では釈迦が羅睺羅や波斯匿王などに因縁を説くとするのに対して、本経典では聴衆が文殊菩薩となっている。『注好選』『今昔物語集』において、説法者と聴衆に関する言及がないのは、経典の形式を取っていないからであろう。

表1

| 授記の名号 | 授記する者 | | 登場人物の後生 | 野干／狐 | 本生譚の場所 | 本生譚の聴衆 | 本生譚の説法者 | 『未曾有因縁経』 | 『注好選』 | 『今昔物語集』 | 本経典 |
|----------------------|-------|------|---------|------|-------------|-----------|---------|----------|-------|---------|----------------------|
| | 帝釈天 | 獅子／虎 | | | | | | | | | |
| 大弁才天 堅牢地神 | 文殊 | 舍利弗 | 帝釈天 | 釈迦 | 毘摩大国、徒陀山 | 羅睺羅・波斯匿王等 | 釈迦 | — | — | — | 大弁才天 大吉祥天 堅牢地神 |
| 大弁才天 堅牢地神 | 文殊 | — | — | 堅牢地神 | 出婆国、祐陀山 | — | — | — | — | 一ノ国、一ノ山 | — |
| 大弁才天 大吉祥天 堅牢地神 | 帝釈天 | — | 辰狐王菩薩 | 聖天 | 娑婆世界、古吒(羅)山 | 文殊 | 釈迦 | — | — | — | — |

次に、本生譚の場所について、諸書の表記はまちまちであるが、形状の近似する漢字が採用されている（例えば、「陀」と「咤」と「吒」）。『今昔物語集』に具体的な場所名が欠けているのは、実在しない地名であるため、意識的に欠落させたと考えられる⁴。

最後に、結末部について、『未曾有因縁経』を除けばすべて授記の場面が記されている。ただ、『注好選』『今昔物語集』では授記する側の文殊菩薩は、本経典では授記を得る側と変わっている。その上、前者において途中から姿を消した帝釈天は、後者において授記する役割を果たしている。

さらに、本経典の最後に曼荼羅の描き方が記されている点は、『注好選』『今昔物語集』と異なる。しかもそれはかなり特殊なものである。例えば、『文殊を中尊とし、左に聖天、右に辰狐王菩薩とする三面ダキニ天の様相は、管見のかぎり、現在確認できるダキニ天の作例の中、一致するものはない。また、ダキニ天の眷属について、『多聞吒枳尼経』や『神道集』『稻荷大明神事』などにみる天女子・赤女子・黒女子・帝釈子の四王子を全て描くものが殆どで、本経典のように帝釈子を登場させないものはみられない。

総じていえば、本経典は、『注好選』『今昔物語集』に収録された堅牢地神の縁起を下敷きに、文殊菩薩の前生譚として作り直したものとみることができ。『溪風拾葉集』では、本経典をダキニ天の本説事を記す経典とする。しかし、本経典の經典名にこそ「吒枳尼」がみられるものの、経文には登場しない。これは、『注好選』『今昔物語集』にみられる堅牢地神の縁起を借用して創作したからであろう。

以上、『注好選』『今昔物語集』との異同を中心に指摘した。その他のダキニ天にまつわる経典との比較は、別の機会に譲りたい。

（崔鵬偉）

三 研究史上の位置と今後の展望

これまでに、ダキニ天信仰に関する多くのテキストが翻刻・紹介されている。

伏見稻荷大社編『稻荷大社由緒記集成』信仰著作篇（伏見稻荷大社社務所、一九五〇）が挙げられる。稻荷社の縁起類をはじめ、稻荷信仰のテキストを多く掲げるが、本経典と特に関係が深いのは、『乙足神供祭文』を含む『稻荷一流大事』や、五字文殊と関連する『頓成悉地祭礼法』などであろう。二〇〇七年には、神奈川県立金沢文庫が企画展「陰陽道×密教」を開催した。企画展では、ダキニ法を含む称名寺聖教が公開されるとともに、図録（神奈川県立金沢文庫、二〇〇七）で聖教が翻刻され、以後の研究における基本資料となった。中でも、元亨二年（一三二二）に湛睿が釵阿から伝授された一連の聖教類によって、式盤を用いたダキニ法である、頓成悉地法の全体像が明らかになったことは重要である。先述の『乙足神供祭文』についても、現存最古の鎌倉写本が紹介された⁵。

これらのテキストを対象とした研究も、順次進んでいる。早いものとしては、榎田良洪氏が『真言密教成立過程の研究』（山喜房仏書林、一九六四）で、頓成悉地法関連の聖教や『辰菩薩口伝』に言及している。西岡芳文「ダキニ法の成立と展開」（『朱』五七、二〇一四）は、ダキニ天を祀る修法の変遷を体系的に論じ、関連するテキスト群を取り上げると共に、近年の研究動向・成果も広くまとめている。また、本経典と関連した内容を持つ『神道集』巻三「稻荷大明神事」については、有賀夏紀『神道集』巻三「稻荷大明神事」に

おける表現をめぐって―ダキニ天信仰の受容を中心に―」（『人文』一三、二〇一四）で詳細に論じられている。同じく有賀夏紀氏は「称名寺聖教『辰菩薩口伝』について―中世ダキニ天信仰の側面―」（『北海学園大学人文論集』六六、二〇一九）で、天台宗の円密一致思想がダキニ天信仰にもたらした新たな一面を提示した。

ダキニ天曼荼羅及び、それに類する図像についての研究には、林温「陀枳尼天曼荼羅について」（『仏教芸術』二一七、一九九四）、入江多美「ダキニ天（辰狐王菩薩）に関する一試論―日光山輪王寺蔵「伊頭那（飯繩）曼荼羅図」を中心として―」（『美術史論集』八、二〇〇八）等がある。

本経典は、ダキニ天信仰のテキスト群において、重要な意味を持つものである。特に『注好選』巻下第三十三話および『今昔物語集』巻五第二十一話の類話が本経典にあることは、これまでに紹介されたテキストには見られない特徴である。本経典の成立背景が解明されれば、『注好選』及び『今昔物語集』における同話の研究においても重要な手掛かりとなる。そのためにはまた、『注好選』が典拠とする『撰寿経』と本経典とが、どのような関係にあるのかという問題に取り組みする必要もある。⁽⁶⁾ また本経典には、具体的な図像を意識したような記述が見られる。現存するダキニ天の図像や、同様の記述を持つ他のテキストと比較を行うことで、本経典が作られた環境の解明に近づくものと思われる。

（田中亜美）

注

- (1) 複数の表記がみられるため、本稿において、便宜的に「ダキニ天」に統一して示す。
- (2) 『注好選』所収話と『今昔物語集』のそれとの比較研究は、田中亜美「狐と堅牢地神―日本における〈狐仮虎威〉説話の受容と『撰寿経』―」（『早稲田大学文学研究科紀要』六六、二〇二二、掲載予定）参照。
- (3) 『溪嵐拾葉集』茶枳尼天秘訣「付此天即位灌頂習事」には、この話が言及されている。また入江多美氏は、ダキニ天法を記す現存最古の偽経『多聞吒枳尼経』（二二二九年写）にみられる、「狐が仏の師であり、仏が狐の弟子であるという内容」がこの話の変奏だと指摘している。入江多美「輪王寺蔵「伊頭那（飯繩）曼荼羅図」と仁和寺蔵『多聞吒枳尼経』について」（『歴史と文化』一七、栃木県歴史文化研究会、二〇〇八）参照。
- (4) 宮田尚「今昔物語集と注好選・再考」（『日本文学研究』一九、一九八三）、原田信之「今昔物語集」天竺部の構成―同文的同語をてがかりとして―」（『論究日本文学』五一、一九八八）など参照。
- (5) 西岡芳文「金沢称名寺における頓成悉地法―企画展「陰陽道×密教」補遺―」（『金沢文庫研究』三二〇、二〇〇八）参照。展覧会に先立ち、頓成悉地法に関連する聖教の概要が、西岡芳文「式盤をまつる修法―聖天式法・頓成悉地法・ダキニ法―」（『金沢文庫研究』三一八、二〇〇七）で紹介されている。
- (6) 『撰寿経』は現存せず、『注好選』が典拠とする以外には、『白宝抄』『白宝口抄』に佚文が確認できる。田中注(2)前掲論文、同「四臂堅牢地神の成立と『撰寿経』」（『印度学仏教学研究』六九、二〇二二、掲載予定）参照。